

笑いというのは、日常ごく卑近で、ありふれた、揮発性が高く、とりとめのない、なんともとらえどころのない、とはいえ人類普遍の現象である。笑い学のいちばんの古典、『笑い』の冒頭で、H.ベルクソンは笑いについてこう書いている。「アリストテレス以来、最も偉大な思想家たちがこのささやかな問題（＝笑い）に立ち向かってきた。けれども、この問題（＝笑い）は彼らの努力をかいぐり、滑り抜け、身をかかわしては立ちはだかることを繰り返している。それ（＝笑い）は哲学的思索に対して仕掛けられた憎たらしい挑戦と言ってよい」（H.ベルクソン＝増田靖彦訳『笑い』光文社古典新訳文庫、19頁）。

ベルクソンがこう書いた 1900 年から 120 年近くたったいまでもこの「憎たらしさ」はさほど変わっていないが、ベルクソンのような先人たちが道を切り拓いてくれたおかげで、ありがたいことに 1976 年には国際ユーモア学会 International Society for Humor Studies (略称 ISHS) という、笑い学の学際的・国際的学会ができた。なにしろ笑いというのはぬえみたいな得体のしれない現象なので、文系・理系いろんな学問の知恵を出し合ってその全体像に迫ってゆこうという研究組織である。

ISHS から 18 年遅れて、1994 年、日本にも似たような学会ができた。日本笑い学会がそれである。似ているといえば似ており、同じようなものといえなくはないが、国際的と国内的というあたりまえの違い以外に、両者にはいくらかの違いがある。まずは、人的組成の違い。ISHS はふつうの学会がそうであるようにおおよそ学者・研究者の団体であるのに対して、日本笑い学会は職業的な学者・研究者は非常に少数派であり、「市民参加型学会」を自称しているように、典型的な「異業種間交流」の場となっている。2 番目の違いは学会名称に表れている。かたやユーモア学会、かたや笑い学会。前者はユーモアという知的現象を中心的な関心対象とし、後者は笑いという身体現象に注目するわけだ。3 番目の違いは、志向性の違い。学会としては当然のことながら知的好奇心への志向が強いのが ISHS で、これに対し、知的好奇心より演芸志向のほうむしろ優勢なのが日本笑い学会、ということが出来る。ある意味で、いささか困ったことである。

国際学会というものが一般にどのように運営されているのか寡聞にして知らないが、大会についていうと、ISHS はジョーク大国であり、ユーモア研究が最も盛んで、その中心といってもいいアメリカとそれ以外の国とでおおよそ年ごとに交互に開催されている。一方、ISHS でアメリカが占める位置を日本笑い学会で占めているのが大阪であって、2017 年までの 24 大会中半数近い 11 回が大阪で開催されている。参考までにこれまでの開催地を列挙してみよう。

1994年	第1回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
1995年	第2回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
1996年	第3回	東京	江戸東京博物館
1997年	第4回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
1998年	第5回	北海道・札幌市	札幌サンプラザ
1999年	第6回	大阪・河南町	大阪芸術大学
2000年	第7回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
2001年	第8回	福岡・福岡市	あいにふ健康づくりセンター
2002年	第9回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
2003年	第10回	愛知・名古屋市	金城学院大学
2004年	第11回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
2005年	第12回	広島・広島市	広島国際大学
2006年	第13回	大阪・河南町	大阪芸術大学
2007年	第14回	静岡・浜松市	静岡文化芸術大学
2008年	第15回	京都・京都市	京都外国語大学
2009年	第16回	宮城・仙台市	東北大学
2010年	第17回	大阪・吹田市	関西大学千里山キャンパス
2011年	第18回	大阪・堺市	関西大学堺キャンパス
2012年	第19回	新潟・新潟市	新潟市 NSG 学生総合プラザ STEP
2013年	第20回	北海道・札幌市	札幌市教育文化会館
2014年	第21回	大阪・堺市	関西大学堺キャンパス
2015年	第22回	三重・津市	三重大学
2016年	第23回	大阪・堺市	関西大学堺キャンパス
2017年	第24回	宮城・石巻市	石巻専修大学

ユーモア研究のメッカ、アメリカを軸に、ISHS がアメリカ→アメリカ以外→アメリカ→アメリカ以外→……という順番で開催されているように、日本笑い学会がおおよそ大阪→大阪以外→大阪→大阪以外という順番で開催されているのがおわかりになる。「笑い学のメッカ大阪」といったところだが、もう一つ目立つのは、大阪で11回開催といっても、うち9回は関西大学だということ。つまり「笑い学のメッカ大阪」の中心は関西大学だということである。ISHS がアメリカで隔年に開催されているといっても、それは決して特定の都市、特定の大学ではないから、大阪、関西大学へのこの集中度は際立っている。ではなぜ、笑い学のメッカは大阪であり、とりわけ関西大学なのか。大阪は「笑いのメッカ」であり（そうなった事情については数多くの論考がある）、関西大学はその大阪を代表する大学だからといえ、それはまったくそのとおりののだが、それだけではあまりに愛想がないから、日本笑い学会設立10周年記念刊行冊子『日本笑い学会 10年の歩み』（2004）

によりながら、日本笑い学会の設立経緯にまでさかのぼって、以下少しだけ詳しく事情を説明してみよう。

日本笑い学会の母体となった「笑学の会」は笑いを志向するおもに関西在住の学者、作家、評論家、放送関係者、新聞関係者をメンバーとして、1978年3月に活動を開始した。当初は仮称で「漫才研究会」といったそうで、いかにもそれらしく早くも発足半年後の1978年9月には『ダイラケ爆笑三夜』という漫才ライブを開催し、大成功を収めている。それに先立つこと3ヶ月、1978年6月には「笑学の会」と正式名称を定め、会則等を制定した。会則には「本会の目的は、会員相互の交流につとめ、上方演芸に関する笑いの研究活動を通じて文化の向上・発展に寄与することとする」（傍点森下）とあり、これを前掲『10年の歩み』は、「『漫才研究会』（仮称）として発足した名残りをとどめ、現在の学会（＝日本笑い学会）が時折間違えて呼ばれる『お笑い学会』に近い存在であったことが感じられる」と評している。むべなるかな。「お笑い学会」とよばれるのは今でもよくあることで、日本笑い学会は演芸志向が強いとさきに指摘したが、それはもともとそういうものだったのだと納得させられる。

ともあれこうして、大阪が日本笑い学会の中心地となったのは、大阪が大衆演芸としてのお笑いの中心、漫才の中心地であったからだということになる。その後、笑学の会は漫才あるいは上方演芸という枠を超えてテーマを広げてゆくことになったが、その発足時からずっと代表世話人をつとめたのが元読売テレビ勤務で関西大学社会学部の教員、井上宏氏だった。氏はそのまま後身、日本笑い学会の初代会長となるが、関西大学が「笑い学のメッカ大阪」となったのは、そうして氏がまさしく首尾一貫、漫才研究会、笑学の会の組織と活動の軸となってきたからに他ならないのである。

さて、笑学の会は約16年にわたる息の長い継続的な活動の後、1994年に「日本笑い学会」へと発展的解消をとげることになるが、そのきっかけについて、井上氏は『10年の歩み』のなかでこう語っている。「1993年の秋に、飲み会の最中に誰かが、『笑学の会を全国的な学会にしようよ』と声を上げ、『賛成！ 賛成！』と一気に決まってしまった。長年のサロン（＝笑学の会）の歩みからして、思いはみな同じであったのだと思う」。満を持してというか、機が熟して果実が落ちるというか、学会の誕生とはこういうものかもしれない。こうしてついに1994年7月9日、日本笑い学会は創立総会を迎えるところとなった。くり返しになるが初代会長は井上宏氏、会場は関西大学百周年会館であった。

今年が学会創立25周年となる。大阪で始まった学会であり、今日まで変わることなく大阪に本部・事務所を置いて活動を続けてきたが、活動が全国規模となるにつれて支部活動が活性化し、いまでは北海道、東北、石巻、東北、関東、新潟、信州、浜松、中部、三重、滋賀、京都、島根、岡山、広島、四国、高知、博多、学術と18支部を擁するに至っている。たいていの学会は東京が活動の中心だと思うが、大阪中心の全国学会、なんとも愉快ではないか。この間、2010年まで16年間、井上宏氏は会長を務められ、関西大学と日本笑い学会との絆をゆるぎないものとするのに多大な貢献をされ、その後は今日まで私

が後継者としてその絆を維持してきた。

一方、ISHSには各国に支部というものはなく、日本支部などというものもないが、日本笑い学会には国際経験豊かな会員が多くいることもあって、実質上「日本支部」的な役割を果たしてきた。このことを最もよく表しているのが、2000年の第19回ISHS世界大会が7月24日～27日の4日間、関西大学百周年記念会館で開催されたことで、世界中のユーモア研究者が日本の「笑い学のメッカ」関西大学に集結して研究を交流し、それに先立つ22・23日の二日間、やはり同会館で開催された日本笑い学会第7回大会では、国際ユーモア学会の重鎮J.モリオール氏に記念講演していただいたのであった。

関西在住のお笑い演芸関係者のごく小規模な研究会から出発して、多種多様なテーマに関心を持つ会員約1000人の、しかも世界に開かれた全国学会へと大きく拡大・発展してきた日本笑い学会。これからどう展開していくのだろうか。遠い将来のことは正直わからないのであるが、少なくとも当分の間は、これまでと変わらず「笑いのメッカ」大阪と「笑い学のメッカ」関西大学を中心にしながら活動を続けてゆくのではないかと予測している。

(もりした しんや、研究分担者、人間健康学部教授、日本笑い学会会長)